

05.09.03

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日
Date of Application: 2002年 9月 9日

REC'D 23 OCT 2003

出 願 番 号
Application Number: 特願2002-262403

WIPO PCT

[ST. 10/C]: [JP 2002-262403]

出 願 人
Applicant(s): 日東電工株式会社

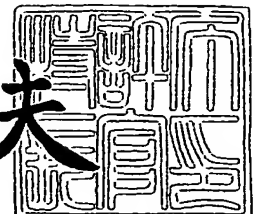
PRIORITY
DOCUMENT

SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

2003年10月 9日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今 井 康 夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 P02369ND

【提出日】 平成14年 9月 9日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 G02B 5/30

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府茨木市下穂積1丁目1番2号 日東電工株式会社
内

【氏名】 上条 卓史

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府茨木市下穂積1丁目1番2号 日東電工株式会社
内

【氏名】 宮武 稔

【特許出願人】

【識別番号】 000003964

【住所又は居所】 大阪府茨木市下穂積1丁目1番2号

【氏名又は名称】 日東電工株式会社

【代理人】

【識別番号】 100092266

【弁理士】

【氏名又は名称】 鈴木 崇生

【電話番号】 06-6838-0505

【選任した代理人】

【識別番号】 100104422

【弁理士】

【氏名又は名称】 梶崎 弘一

【電話番号】 06-6838-0505

【選任した代理人】

【識別番号】 100105717

【弁理士】

【氏名又は名称】 尾崎 雄三

【電話番号】 06-6838-0505

【選任した代理人】

【識別番号】 100104101

【弁理士】

【氏名又は名称】 谷口 俊彦

【電話番号】 06-6838-0505

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 074403

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9903185

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 偏光子、光学フィルムおよび画像表示装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 吸収二色性材料を含有する透光性熱可塑性樹脂により形成されるマトリクス中に、微小領域が分散された構造のフィルムからなる偏光子であって、

前記微小領域は、配向された複屈折材料により形成されており、かつ当該複屈折材料は、少なくとも配向処理時点で液晶性を示すことを特徴とする偏光子。

【請求項 2】 微小領域を形成する複屈折材料と、透光性熱可塑性樹脂との各光軸方向に対する屈折率差は、

最大値を示す軸方向における屈折率差 (Δn^1) が 0.03 以上であり、かつ Δn^1 方向と直交する二方向の軸方向における屈折率差 (Δn^2) が、前記 Δn^1 の 50% 以下であることを特徴とする請求項 1 記載の偏光子。

【請求項 3】 吸収二色性材料は、当該材料の吸収軸が、 Δn^1 方向に配向していることを特徴とする請求項 1 または 2 記載の偏光子。

【請求項 4】 入射光強度に対する後方散乱強度の比率が、30% 以下であることを特徴とする請求項 1～3 のいずれかに記載の偏光子。

【請求項 5】 前記フィルムが、延伸されていることを特徴とする請求項 1～4 のいずれかに記載の偏光子。

【請求項 6】 微小領域は、 Δn^1 方向の長さが 0.05～500 μm であることを特徴とする請求項 1～5 のいずれかに記載の偏光子。

【請求項 7】 微小領域を形成する複屈折材料が、透光性熱可塑性樹脂のガラス転移温度よりも低い温度領域において、ネマチック相またはスメクチック相の状態が出現する液晶性熱可塑性樹脂であることを特徴とする請求項 1～6 のいずれかに記載の偏光子。

【請求項 8】 微小領域を形成する複屈折材料が、透光性熱可塑性樹脂のガラス転移温度よりも低い温度領域において、ネマチック相またはスメクチック相状態が出現する液晶単量体を配向させた後に、重合したものであることを特徴と

する請求項 1～6 のいずれかに記載の偏光子。

【請求項 9】 吸収二色性材料が、可視光波長領域に二色比 3 以上の吸収帯を少なくとも 1 箇所以上有する染料であることを特徴とする請求項 1～8 のいずれかに記載の偏光子。

【請求項 10】 請求項 1～9 のいずれかに記載の偏光子の少なくとも片面に、透明保護層を設けた偏光板。

【請求項 11】 請求項 1～9 のいずれかに記載の偏光子または請求項 10 記載の偏光板が、少なくとも 1 枚積層されていることを特徴とする光学フィルム。

【請求項 12】 請求項 1～9 のいずれかに記載の偏光子、請求項 10 記載の偏光板または請求項 11 記載の光学フィルムが用いられていることを特徴とする画像表示装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、偏光子に関する。また本発明は当該偏光子を用いた偏光板、光学フィルムに関する。さらには当該偏光板、光学フィルムを用いた液晶表示装置、有機 EL 表示装置、PDP 等の画像表示装置に関する。

【0002】

【従来の技術】

時計、携帯電話、PDA、ノートパソコン、TV などでは液晶表示装置が急速に市場展開している。液晶表示装置は、液晶のスイッチングによる偏光状態変化を可視化させたものであり、その表示原理から偏光子が用いられている。かかる偏光子には、より明るく（高透過率）、より高コントラスト（高偏光度）のものが開発され導入されている。特に、携帯電話、PDA などの屋外での過酷な環境下での使用を想定した液晶表示装置や、車載用ナビゲーション、液晶プロジェクタ用の液晶表示装置等には非常に高い耐熱信頼性が要求される。

【0003】

偏光子としては、たとえば、ポリビニルアルコールにヨウ素を吸着させ、延伸

した構造のヨウ素系偏光子が高透過率、高偏光度を有することから広く用いられている。しかし、ヨウ素は高温で昇華したり、または錯体構造が変化するために偏光性能を維持することが難しい。そのため、耐熱信頼性の要求の高い分野ではヨウ素の代わりに二色性染料を用いた染料系偏光子が用いられている（たとえば、特許文献1参照。）。

【0004】

しかし、ヨウ素に比べて、二色性染料は吸収二色比が低い。そのため、染料系偏光子は、ヨウ素系偏光子に比べて透過率、偏光度を両立させることが難しい。すなわち、染料系偏光子では、明るさを重視して二色性染料の濃度を薄くすると透過率が向上するが偏光度が低下してコントラストが低くなり、一方、コントラストを重視して二色性染料の濃度を高めるとする偏光度が向上してコントラストは向上するが透過率が低下して暗くなってしまう問題があった。

【0005】

【特許文献1】

特開昭62-123405号公報（第1頁）。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】

本発明は、耐熱信頼性のよい染料系偏光子であって、透過率および偏光度がよく、視認性の良好な偏光子を提供することを目的とする。

【0007】

また本発明は、当該偏光子を用いた偏光板、光学フィルムを提供することを目的とする。さらには当該偏光板、光学フィルムを用いた画像表示装置を提供することを目的とする。

【0008】

【課題を解決するための手段】

本発明者らは、前記課題を解決すべく鋭意検討を重ねた結果、以下に示す偏光子により前記目的を達成できることを見出し本発明を完成するに至った。

【0009】

すなわち本発明は、吸収二色性材料を含有する透光性熱可塑性樹脂により形成

されるマトリクス中に、微小領域が分散された構造のフィルムからなる偏光子であって、

前記微小領域は、配向された複屈折材料により形成されており、かつ当該複屈折材料は、少なくとも配向処理時点で液晶性を示すことを特徴とする偏光子、に関する。

【0010】

上記本発明の偏光子は、透光性熱可塑性樹脂と吸収二色性材料で形成される染料系偏光子をマトリクスとすることで耐熱信頼性を確保している。また前記マトリクス中に、液晶性を示す材料により形成した複屈折材料の微小領域を分散させることで、吸収二色性の機能に加えて、散乱異方性の機能を合わせ持たせることにより、透過率と偏光度を両立した視認性の良好な偏光子を得たものである。

【0011】

前記偏光子において、微小領域を形成する複屈折材料と、透光性熱可塑性樹脂との各光軸方向に対する屈折率差は、

最大値を示す軸方向における屈折率差 (Δn^1) が 0.03 以上であり、

かつ Δn^1 方向と直交する二方向の軸方向における屈折率差 (Δn^2) が、前記 Δn^1 の 50% 以下であることが好ましい。

【0012】

各光軸方向に対する前記屈折率差 (Δn^1)、(Δn^2) を、前記範囲に制御することで、USP2 23902 号明細書で提案されるような、 Δn^1 方向の直線偏光のみを選択的に散乱させた機能を有する散乱異方性フィルムとすることができる。すなわち、 Δn^1 方向では屈折率差が大きいため、直線偏光を散乱させ、一方、 Δn^2 方向では屈折率差が小さいため、直線偏光を透過させることができる。なお、 Δn^1 方向と直交する二方向の軸方向における屈折率差 (Δn^2) はともに等しいことが好ましい。

【0013】

散乱異方性を高くするには、 Δn^1 方向の屈折率差 (Δn^1) を、0.03 以上、好ましくは 0.05 以上、特に好ましくは 0.10 以上とするのが好ましい。また Δn^1 方向と直交する二方向の屈折率差 (Δn^2) は、前記 Δn^1 の 50

%以下、さらには30%以下であるのが好ましい。

【0014】

前記偏光子において、吸収二色性材料は、当該材料の吸収軸が、 Δn^1 方向に配向していることが好ましい。

【0015】

マトリクス中の吸収二色性材料を、その材料の吸収軸が前記 Δn^1 方向に平行になるように配向させることにより、散乱偏光方向である Δn^1 方向の直線偏光を選択的に吸収させることができる。その結果、入射光のうち Δn^2 方向の直線偏光成分は、散乱されることなく透過する。一方、 Δn^1 方向の直線偏光成分は散乱され、かつ吸収二色性材料によって吸収される。通常、吸収は、吸収係数と厚みによって決定される。本発明の偏光子は、散乱によって見かけの厚みが厚いため、 Δn^1 方向の偏光成分は散乱異方性のない状態よりも余分に吸収される。つまり同じ透過率でより高い偏光度が得られる。

【0016】

以下、理想的なモデルについて詳細に説明する。一般に直線偏光子に用いられる二つの主透過率（第1主透過率 k_1 （透過率最大方位= Δn^2 方向の直線偏光透過率）、第2主透過率 k_2 （透過率最小方向= Δn^1 方向の直線偏光透過率））を用いて以下議論する。

【0017】

市販の染料系偏光子では吸収型二色性材料が一方向に配向しているとすれば、平行透過率、偏光度はそれぞれ、

$$\text{平行透過率} = 0.5 \times ((k_1)^2 + (k_2)^2),$$

$$\text{偏光度} = (k_1 - k_2) / (k_1 + k_2), \text{で表される。}$$

【0018】

一方、本発明の偏光子では Δn^1 方向の偏光は散乱され、平均光路長は α 倍になっており、散乱による偏光解消は無視できる過程すると、その場合の主透過率はそれぞれ、 k_1 、 $k_2' = 10^X$ （但し、 x は $\alpha \log k_2$ である）、で表される。

【0019】

つまり、この場合の平行透過率、偏光度は、

平行透過率 $= 0.5 \times ((k_1)^2 + (k_2')^2)$ 、

偏光度 $= ((k_1 - (k_2')^2) / ((k_1 + (k_2')^2))$ 、で表される。

【0020】

例えば、市販の染料系偏光子（平行透過率 0.321，偏光度 0.90： $k_1 = 0.80$ ， $k_2 = 0.04$ ）に用いられている吸収型二色性材料と同量の同材料を用いて本発明の偏光子を作成したとすると、計算上では α が 2 倍の時、平行透過率は 0.320、偏光度は 0.996 の特性が得られることになる。偏光度を 0.90 に固定して吸収型二色性材料の濃度を薄くすると平行透過率は 0.406 まで明るくすることができる。

【0021】

上記計算上値は理論値であり、もちろん散乱による偏光解消や表面反射、後方散乱の影響などにより幾分かは機能が低下する。したがって、上記機能を十分に発現させるためには、後方散乱は少ない方がよく、入射光強度に対する後方散乱強度の比率は 30% 以下が好ましく、さらには 20% 以下が好ましい。

【0022】

また上記式から分かるように、 α は高い程良く、用いる吸収型二色性材料の二色比が高いほど高機能が期待できる。 α を高くするには、散乱異方性機能をできるだけ高くし、 Δn^1 方向の偏光を選択的に強く散乱させればよい。

【0023】

前記偏光子としては、フィルムが、延伸されているものを好適に用いることができる。

【0024】

前記偏光子において、微小領域は、 Δn^1 方向の長さが $0.05 \sim 500 \mu\text{m}$ であることが好ましい。

【0025】

可視光領域の波長のうち、振動面を Δn^1 方向に有する直線偏光を強く散乱させるためには、分散分布している微小領域は、 Δn^1 方向の長さが $0.05 \sim 500 \mu\text{m}$ 、好ましくは $0.5 \sim 100 \mu\text{m}$ となるように制御されることが好まし

い。微小領域の Δn^1 方向の長さが波長に比べて短すぎると十分に散乱が起こらない。一方、微小領域の Δn^1 方向の長さが長すぎるとフィルム強度が低下したり、微小領域を形成する液晶性材料が、微小領域中で十分に配向しないなどの問題が生じるおそれがある。

【0026】

前記偏光子において、微小領域を形成する複屈折材料が、透光性熱可塑性樹脂のガラス転移温度よりも低い温度領域において、ネマチック相またはスメクチック相の状態が出現する液晶性熱可塑性樹脂が好適に用いられる。

【0027】

前記偏光子において、微小領域を形成する複屈折材料が、透光性熱可塑性樹脂のガラス転移温度よりも低い温度領域において、ネマチック相またはスメクチック相状態が出現する液晶単量体を配向させた後に、重合したものが好適に用いられる。

【0028】

前記偏光子において、吸収二色性材料が、可視光波長領域に二色比3以上の吸収帯を少なくとも1箇所以上有する染料であることが好ましい。

【0029】

二色比を評価する尺度としては、たとえば、染料を溶解させた適当な液晶材料を用いてホモジニアス配向の液晶セルを作成し、そのセルを用いて測定した偏光吸収スペクトルにおける吸収極大波長での吸収二色比が用いられる。当該評価法において、例えば標準液晶としてメルク社製のE-7を使用した場合には、用いる染料としては、吸収波長での二色比の目安値は3以上、好ましくは6以上、さらに好ましくは9以上である。

【0030】

また本発明は、前記偏光子の少なくとも片面に、透明保護層を設けた偏光板、に関する。

【0031】

また本発明は、前記偏光子、前記偏光板が、少なくとも1枚積層されていることを特徴とする光学フィルム、に関する。

【0032】

さらには本発明は、前記偏光子、前記偏光板または前記光学フィルムが用いられていることを特徴とする画像表示装置、に関する。

【0033】

【発明の実施の形態】

以下に本発明の偏光子を図面を参照しながら説明する。図1は、本発明の偏光子の概念上面図であり、吸収二色性材料2を含有する透光性熱可塑性樹脂1によりフィルムが形成されており、当該フィルムをマトリクスとして、微小領域3が分散された構造を有する。

【0034】

図1は、微小領域3と、透光性熱可塑性樹脂1との屈折率差が最大値を示す軸方向(Δn^1 方向)に、吸収二色性材料2が配向している場合の例である。微小領域3では、 Δn^1 方向の偏光成分は散乱している。図1では、フィルム面内の一方向にある Δn^1 方向は吸収軸となっている。フィルム面内において Δn^1 方向に直交する Δn^2 方向は透過軸となっている。なお、 Δn^1 方向に直交するもう一つの Δn^2 方向は厚み方向である。

【0035】

透光性熱可塑性樹脂1としては、可視光領域において透光性を有するものを特に制限なく使用できる。たとえば、従来より偏光子に用いられているポリビニルアルコールまたはその誘導体があげられる。ポリビニルアルコールの誘導体としては、ポリビニルホルマール、ポリビニルアセタール等があげられる他、エチレン、プロピレン等のオレフィン、アクリル酸、メタクリル酸、クロトン酸等の不飽和カルボン酸そのアルキルエステル、アクリルアミド等で変性したものがあげられる。

【0036】

また透光性熱可塑性樹脂1としては、例えばポリエチレンテレフタレートやポリエチレンナフタレート等のポリエステル系樹脂；ポリスチレンやアクリロニトリル・スチレン共重合体（AS樹脂）等のスチレン系樹脂；ポリエチレン、ポリプロピレン、シクロ系ないしはノルボルネン構造を有するポリオレフィン、エチ

レン・プロピレン共重合体等のオレフィン系樹脂等があげられる。さらには、塩化ビニル系樹脂、セルロース系樹脂、アクリル系樹脂、アミド系樹脂、イミド系樹脂、スルホン系ポリマー、ポリエーテルスルホン系樹脂、ポリエーテルエーテルケトン系樹脂ポリマー、ポリフェニレンスルフィド系樹脂、塩化ビニリデン系樹脂、ビニルブチラール系樹脂、アリレート系樹脂、ポリオキシメチレン系樹脂、シリコン系樹脂、ウレタン系樹脂等があげられる。これらは1種または2種以上を組み合わせることができる。また、フェノール系、メラミン系、アクリル系、ウレタン系、アクリルウレタン系、エポキシ系、シリコン系等の熱硬化型または紫外線硬化型の樹脂の硬化物を用いることもできる。

【0037】

前記透光性熱可塑性樹脂は、成形歪み等による配向複屈折を生じにくい等方性を有するものでもよく、配向複屈折を生じやすい異方性を有するものでもよい。透光性熱可塑性樹脂は、耐熱性、加工性の点からガラス転移温度が110℃以上、さらには115℃以上、特に120℃以上を有するものが好ましい。また加重撓み温度が80℃以上を有するものが好ましい。加重撓み温度は、JIS K 7207に準じ、181.4 N/cm²の曲げ応力を、加熱浴中の高さ10mmの試験片に加えながら、2℃/分で伝熱媒体を昇温させ、試験片の撓み量が0.32mmに達したときに伝熱媒体の温度である。

【0038】

微小領域3を形成する複屈折材料は、少なくとも配向処理時点で液晶性を示すもの（以下、液晶性材料という）が用いられる。すなわち、液晶性材料は、配向処理時点で液晶性を示していれば、形成された微小領域3においては複屈折材料を有していれば、液晶性を示していてもよく、液晶性を喪失して等方性であってもよい。

【0039】

微小領域3を形成する複屈折材料（液晶性材料）としては、たとえば、透光性熱可塑性樹脂1のガラス転移温度よりも低い温度領域においてネマチック相またはスメクチック相の状態が出現する液晶性熱可塑性樹脂が好適に用いられる。液晶性熱可塑性樹脂は、通常、加熱により配向し、冷却して固定させて、液晶性を維

持したまま微小領域3を形成する。また、微小領域3を形成する複屈折材料（液晶性材料）としては、たとえば、透光性熱可塑性樹脂1のガラス転移温度よりも低い温度領域においてネマチック相またはスメクチック相の状態が出現する液晶性単量体を配向させた後に、紫外線照射等により重合したものが好適に用いられる。液晶性単量体は配合後に、重合、架橋等により固定するが、固定した状態で微小領域3を形成するが、形成した微小領域3では液晶性が喪失されてしまうものがある。液晶性材料としては、微小領域3においても液晶性を維持する、液晶性熱可塑性樹脂が好ましい。

【0040】

前記液晶性熱可塑性樹脂としては、主鎖型、側鎖型またはこれらの複合型の各種骨格のポリマーを特に制限なく使用できる。主鎖型の液晶ポリマーとしては、芳香族単位等からなるメソゲン基を結合した構造を有する縮合系のポリマー、たとえば、ポリエステル系、ポリアミド系、ポリカーボネート系、ポリエステルイミド系などのポリマーがあげられる。メソゲン基となる前記芳香族単位としては、フェニル系、ビフェニル系、ナフタレン系のものがあげられ、これら芳香族単位は、シアノ基、アルキル基、アルコキシ基、ハロゲン基等の置換基を有していてもよい。

【0041】

側鎖型の液晶ポリマーとしては、ポリアクリレート系、ポリメタクリレート系、ポリ- α -ハローアクリレート系、ポリ- α -ハローシアノアクリレート系、ポリアクリルアミド系、ポリシロキサン系、ポリマロネート系の主鎖を骨格とし、側鎖に環状単位等からなるメソゲン基を有するものがあげられる。メソゲン基となる前記環状単位としては、たとえば、ビフェニル系、フェニルベンゾエート系、フェニルシクロヘキサン系、アゾキシベンゼン系、アゾメチン系、アゾベンゼン系、フェニルピリミジン系、ジフェニルアセチレン系、ジフェニルベンゾエート系、ビスシクロヘキサン系、シクロヘキシルベンゼン系、ターフェニル系等があげられる。なお、これら環状単位の末端は、たとえば、シアノ基、アルキル基、アルケニル基、アルコキシ基、ハロゲン基、ハロアルキル基、ハロアルコキシ基、ハロアルケニル基等の置換基を有していてもよい。またメソゲン基のフェニ

ル基は、ハロゲン基を有するものを用いることができる。

【0042】

また、いずれの液晶ポリマーのメソゲン基も屈曲性を付与するスペーサ部を介して結合していてもよい。スペーサー部としては、ポリメチレン鎖、ポリオキシメチレン鎖等があげられる。スペーサー部を形成する構造単位の繰り返し数は、メソゲン部の化学構造により適宜に決定されるがポリメチレン鎖の繰り返し単位は0～20、好ましくは2～12、ポリオキシメチレン鎖の繰り返し単位は0～10、好ましくは1～3である。

【0043】

前記液晶性熱可塑樹脂は、ガラス転移温度50℃以上、さらには80℃以上であることが好ましい。また、重量平均分子量が2千～10万程度のものが好ましい。

【0044】

液晶性単量体としては、末端にアクリロイル基、メタクリロイル基等の重合性官能基を有し、これに前記環状単位等からなるメソゲン基、スペーサ部を有するものがあげられる。また重合性官能基として、アクリロイル基、メタアクリロイル基等を2つ以上有するものを用いて架橋構造を導入して耐久性を向上させることもできる。

【0045】

微小領域3を形成する材料は、前記液晶性材料に全てが限定されるものではなく、マトリクス材料と異なる素材であれば、非液晶性の樹脂を用いることができる。樹脂としては、ポリビニルアルコールとその誘導体、ポリオレフィン、ポリアリレート、ポリメタクリレート、ポリアクリルアミド、ポリエチレンテレフタレート、アクリルスチレン共重合体などがあげられる。また微小領域3を形成する材料としては、複屈折を持たない粒子などを用いることができる。当該微粒子としては、たとえば、ポリアリレートなどの樹脂があげられる。微粒子のサイズは徳に制限されないが、0.05～500μm、好ましくは0.5～100μmの粒子径のものが用いられる。微小領域3を形成する材料は、前記液晶性材料が好ましいが、前記液晶性材料には非液晶性材料を混入して用いることができる。

。さらには微小領域3を形成する材料にて、非液晶性材料を単独で使用することもできる。

【0046】

吸収二色性材料としては、耐熱性を有し、複屈折材料の前記液晶性材料を加熱して配向させる場合にも、分解や変質により二色性を喪失しないものが好ましく用いられる。前記の通り、吸収二色性材料は、可視光波長領域に二色比3以上の吸収帯を少なくとも1箇所以上有する染料であることが好ましい。かかる高二色比を有する染料としては、染料系偏光子に好ましく用いられているアゾ系、ペリレン系、アントラキノン系の染料があげられる、これら染料は混合系染料などがとして用いることができる。これら染料は、例えば、特開昭54-76171号公報等に詳しい。

【0047】

なお、カラー偏光子を形成する場合には、その特性に見合った吸収波長を有する染料を用いることができる。また、ニュートラルグレーの偏光子を形成する場合には、可視光全域に吸収が起こるように、二種類以上の染料を適宜混合して用いる。

【0048】

本発明の偏光子は、吸収二色性材料を含有する透光性熱可塑性樹脂によりマトリクスを形成したフィルムを作製するとともに、当該マトリクス中に、液晶性材料により形成された、配向された複屈折材料の微小領域を分散させる。また、フィルム中において、前記 Δn^1 方向の屈折率差(Δn^1)、 Δn^2 方向の屈折率差(Δn^2)が前記範囲になるように制御する。

【0049】

本発明の偏光子の製造方法は特に制限されないが、たとえば、まず、マトリクスを形成する、吸収二色性材料および透光性熱可塑性樹脂を、常法により混合して、透光性熱可塑性樹脂中に吸収二色性材料を含有させる。透光性熱可塑性樹脂と吸収二色性材料の混合割合は特に制限されないが、透光性熱可塑性樹脂100重量部に対して、吸収二色性材料を0.01~100重量部、好ましくは0.05~50重量部である。吸収二色性材料と透光性熱可塑性樹脂の混合は、これら

を同一の溶媒に溶解させることにより行う。通常は、二色性染料と透光性熱可塑性樹脂が同一の溶媒に溶解するものを適宜に選択する。吸収二色性材料と透光性熱可塑性樹脂の混合に用いる溶媒としては、たとえば、水、トルエン、キシレン、ヘキサン、シクロヘキサン、ジクロロメタン、トリクロロメタン、ジクロロエタン、トリクロロエタン、テトラクロロエタン、トリクロロエチレン、メチルエチルケトン、メチルイソブチルケトン、シクロヘキサノン、シクロペンタノン、テトラヒドロフラン、酢酸エチル等があげられる。なお、透光性熱可塑性樹脂として、ポリビニルアルコール等の水溶性のものをを用いる場合には、溶媒としては水が好適に用いられる。吸収二色性材料および透光性熱可塑性樹脂を溶媒に溶解した溶液の濃度は、通常、1～50重量%程度に調整するのが好ましい。

【0050】

一方、微小領域を形成する液晶性材料は、たとえば、前記マトリクス成分（透光性熱可塑性樹脂および吸収二色性材料）との相分離現象を用いて、マトリクス中に分散させる。分散される液晶性材料の使用量は、特に制限されないが、透光性熱可塑性樹脂100重量部に対して、液晶性材料を0.01～100重量部、好ましくは0.1～10重量部である。液晶性材料は溶媒に溶解し、または溶解することなく用いられる。溶媒としては、たとえば、水、トルエン、キシレン、ヘキサン、シクロヘキサン、ジクロロメタン、トリクロロメタン、ジクロロエタン、トリクロロエタン、テトラクロロエタン、トリクロロエチレン、メチルエチルケトン、メチルイソブチルケトン、シクロヘキサノン、シクロペンタノン、テトラヒドロフラン、酢酸エチル等があげられる。マトリクス成分の溶媒と、液晶性材料の溶媒とは同一でもよく異種でもよい。

【0051】

なお、マトリクス成分の溶液、液晶性材料の溶液、または混合溶液中には、分散剤、界面活性剤、紫外線吸収剤、難燃剤、酸化防止剤等の各種の添加剤を含有させることができる。

【0052】

次いで、相分離現象している混合溶液を加熱乾燥し、溶媒を除去することにより、マトリクス中に微小領域が形成された状態のフィルムを作製する。フィルム

の形成方法としては、キャスト法、押出成形法、射出成形法、ロール成形法、流延成形法などの各種の方法を採用できる。フィルム成形にあたっては、混合溶液の粘度、混合溶液の溶媒の選択、組み合わせ、分散剤、混合溶媒の熱プロセス（冷却速度）、乾燥速度を調整することにより、微小領域の大きさや分散性を制御することができる。

【0053】

次いで、配向処理により、吸収二色性材料と液晶性材料を配向させる。配向処理は、たとえば、得られたフィルムを延伸することにより行うことができる。延伸は通常一軸延伸が行われる。なお、延伸方法は空気中での熱延伸でもよいし、透光性熱可塑性樹脂がポリビニルアルコールのような水溶性の場合には、水中での湿式延伸でもよい。延伸倍率は特に制限されないが、通常、2～10倍程度とするのが好ましい。

【0054】

かかる延伸により、吸収二色性材料が延伸軸方向に配向させることができる。また、微小領域において複屈折材料となる液晶性材料は、上記延伸により微小領域中で延伸方向に配向される。したがって、延伸時の温度は、液晶性材料がネマチック相またはスメクチック相の液晶状態または等方相状態になる温度を選択する。延伸時点で配向が不十分な場合には、別途、加熱配向処理などの工程を加えてもよい。

【0055】

液晶性材料の配向には上記延伸に加え、電場や磁場などの外場を併用してもよい。液晶性材料が、液晶性熱可塑性樹脂の場合には、延伸時に配向させた後、室温に冷却させることにより配向が固定化され安定化される。液晶性単量体は、たとえば、光重合開始剤と混合してマトリクス成分の溶液中に分散し、配向後、いずれかのタイミング（染色前、染色後）において紫外線等を照射して硬化し、配向を安定化させる。

【0056】

なお、上記製法では、吸収二色性材料を透光性熱可塑性樹脂と予め混合して用いた場合を例示した。このように延伸前のフィルムを染色する場合には、吸収二

色性材料としては、延伸時の加熱温度で分解、劣化しないものが用いられる。また、上記製法では、吸収二色性材料を透光性熱可塑性樹脂と予め混合して用いた場合を例示したが、吸収二色性材料によるフィルムの染色は、フィルム製膜から延伸の間、さらには延伸後にフィルム中に含有させることもできる。

【0057】

得られた偏光子（フィルム）の厚さは特に制限されないが、通常、 $1\mu\text{m}$ から 3mm 、好ましくは $5\mu\text{m}$ から 1mm 、さらに好ましくは $10\sim 500\mu\text{m}$ である。

【0058】

このようにして得られた偏光子は、延伸方向において、微小領域を形成する複屈折材料の屈折率とマトリクス樹脂の屈折率の大小関係は特になく、延伸方向が Δn^1 方向になっている。延伸軸と直交する二つの垂直方向は Δn^2 方向となっている。また、吸収二色性材料は延伸方向が、最大吸収を示す方向になっており、吸収+散乱の効果が最大限発現された偏光子になっている。

【0059】

本発明によって得られた偏光子は、既存の吸収型偏光板と同様の機能を有するため、吸収型偏光板を用いた様々な応用分野へ何ら変更することく用いることができる。

【0060】

得られた偏光子は、常法に従って、その少なくとも片面に透明保護層を設けた偏光板とすることができる。透明保護層はポリマーによる塗布層として、またはフィルムのラミネート層等として設ることができる。透明保護層を形成する、透明ポリマーまたはフィルム材料としては、適宜な透明材料を用いるが、透明性や機械的強度、熱安定性や水分遮断性などに優れるものが好ましく用いられる。前記透明保護層を形成する材料としては、例えばポリエチレンテレフタレートやポリエチレンナフタレート等のポリエステル系ポリマー、二酢酸セルロースや三酢酸セルロース等のセルロース系ポリマー、ポリメチルメタクリレート等のアクリル系ポリマー、ポリスチレンやアクリロニトリル・スチレン共重合体（AS樹脂）等のスチレン系ポリマー、ポリカーボネート系ポリマーなどがあげられる。

また、ポリエチレン、ポリプロピレン、シクロ系ないしはノルボルネン構造を有するポリオレフィン、エチレン・プロピレン共重合体の如きポリオレフィン系ポリマー、塩化ビニル系ポリマー、ナイロンや芳香族ポリアミド等のアミド系ポリマー、イミド系ポリマー、スルホン系ポリマー、ポリエーテルスルホン系ポリマー、ポリエーテルエーテルケトン系ポリマー、ポリフェニレンスルフィド系ポリマー、ビニルアルコール系ポリマー、塩化ビニリデン系ポリマー、ビニルブチラール系ポリマー、アリレート系ポリマー、ポリオキシメチレン系ポリマー、エポキシ系ポリマー、あるいは前記ポリマーのブレンド物なども前記透明保護層を形成するポリマーの例としてあげられる。

【0061】

前記透明保護フィルムの偏光子を接着させない面（前記塗布層を設けない面）には、ハードコート層や反射防止処理、スティッキング防止や、拡散ないしアンチグレアを目的とした処理を施したものであってもよい。

【0062】

ハードコート処理は偏光板表面の傷付き防止などを目的に施されるものであり、例えばアクリル系、シリコーン系などの適宜な紫外線硬化型樹脂による硬度や滑り特性等に優れる硬化皮膜を透明保護フィルムの表面に付加する方式などにて形成することができる。反射防止処理は偏光板表面での外光の反射防止を目的に施されるものであり、従来に準じた反射防止膜などの形成により達成することができる。また、スティッキング防止処理は隣接層との密着防止を目的に施される。

【0063】

またアンチグレア処理は偏光板の表面で外光が反射して偏光板透過光の視認を阻害することの防止等を目的に施されるものであり、例えばサンドブラスト方式やエンボス加工方式による粗面化方式や透明微粒子の配合方式などの適宜な方式にて透明保護フィルムの表面に微細凹凸構造を付与することにより形成することができる。前記表面微細凹凸構造の形成に含有させる微粒子としては、例えば平均粒径が $0.5 \sim 50 \mu\text{m}$ のシリカ、アルミナ、チタニア、ジルコニア、酸化錫、酸化インジウム、酸化カドミウム、酸化アンチモン等からなる導電性のことも

ある無機系微粒子、架橋又は未架橋のポリマー等からなる有機系微粒子などの透明微粒子が用いられる。表面微細凹凸構造を形成する場合、微粒子の使用量は、表面微細凹凸構造を形成する透明樹脂 100 重量部に対して一般的に 2～50 重量部程度であり、5～25 重量部が好ましい。アンチグレア層は、偏光板透過光を拡散して視角などを拡大するための拡散層（視角拡大機能など）を兼ねるものであってもよい。

【0064】

なお、前記反射防止層、スティッキング防止層、拡散層やアンチグレア層等は、透明保護フィルムそのものに設けることができるほか、別途光学層として透明保護層とは別体のものとして設けることもできる。

【0065】

前記偏光子と透明保護フィルムとの接着処理には、接着剤が用いられる。接着剤としては、イソシアネート系接着剤、ポリビニルアルコール系接着剤、ゼラチン系接着剤、ビニル系ラテックス系、水系ポリエステル等を例示できる。前記接着剤は、通常、水溶液からなる接着剤として用いられ、通常、0.5～60 重量%の固形分を含有してなる。

【0066】

本発明の偏光板は、前記透明保護フィルムと偏光子を、前記接着剤を用いて貼り合わせるにより製造する。接着剤の塗布は、透明保護フィルム、偏光子のいずれに行ってもよく、両者に行ってもよい。貼り合わせ後には、乾燥工程を施し、塗布乾燥層からなる接着層を形成する。偏光子と透明保護フィルムの貼り合わせは、ロールラミネーター等により行うことができる。接着層の厚さは、特に制限されないが、通常 0.1～5 μm 程度である。

【0067】

本発明の偏光板は、実用に際して他の光学層と積層した光学フィルムとして用いることができる。その光学層については特に限定はないが、例えば反射板や半透過板、位相差板（ $1/2$ や $1/4$ 等の波長板を含む）、視角補償フィルムなどの液晶表示装置等の形成に用いられることのある光学層を 1 層または 2 層以上用いることができる。特に、本発明の偏光板に更に反射板または半透過反射板が積

層されてなる反射型偏光板または半透過型偏光板、偏光板に更に位相差板が積層されてなる楕円偏光板または円偏光板、偏光板に更に視角補償フィルムが積層されてなる広視野角偏光板、あるいは偏光板に更に輝度向上フィルムが積層されてなる偏光板が好ましい。

【0068】

反射型偏光板は、偏光板に反射層を設けたもので、視認側（表示側）からの入射光を反射させて表示するタイプの液晶表示装置などを形成するためのものであり、バックライト等の光源の内蔵を省略できて液晶表示装置の薄型化を図りやすいなどの利点を有する。反射型偏光板の形成は、必要に応じ透明保護層等を介して偏光板の片面に金属等からなる反射層を付設する方式などの適宜な方式にて行うことができる。

【0069】

反射型偏光板の具体例としては、必要に応じマット処理した透明保護フィルムの片面に、アルミニウム等の反射性金属からなる箔や蒸着膜を付設して反射層を形成したものなどがあげられる。また前記透明保護フィルムに微粒子を含有させて表面微細凹凸構造とし、その上に微細凹凸構造の反射層を有するものなどもあげられる。前記した微細凹凸構造の反射層は、入射光を乱反射により拡散させて指向性やギラギラした見栄えを防止し、明暗のムラを抑制しうる利点などを有する。また微粒子含有の透明保護フィルムは、入射光及びその反射光がそれを透過する際に拡散されて明暗ムラをより抑制しうる利点なども有している。透明保護フィルムの表面微細凹凸構造を反映させた微細凹凸構造の反射層の形成は、例えば真空蒸着方式、イオンプレーティング方式、スパッタリング方式等の蒸着方式やメッキ方式などの適宜な方式で金属を透明保護層の表面に直接付設する方法などにより行うことができる。

【0070】

反射板は前記の偏光板の透明保護フィルムに直接付与する方式に代えて、その透明フィルムに準じた適宜なフィルムに反射層を設けてなる反射シートなどとして用いることもできる。なお反射層は、通常、金属からなるので、その反射面が透明保護フィルムや偏光板等で被覆された状態の使用形態が、酸化による反射率

の低下防止、ひいては初期反射率の長期持続の点や、保護層の別途付設の回避の点などより好ましい。

【0071】

なお、半透過型偏光板は、上記において反射層で光を反射し、かつ透過するハーフミラー等の半透過型の反射層とすることにより得ることができる。半透過型偏光板は、通常液晶セルの裏側に設けられ、液晶表示装置などを比較的明るい雰囲気中使用する場合には、視認側（表示側）からの入射光を反射させて画像を表示し、比較的暗い雰囲気においては、半透過型偏光板のバックサイドに内蔵されているバックライト等の内蔵光源を使用して画像を表示するタイプの液晶表示装置などを形成できる。すなわち、半透過型偏光板は、明るい雰囲気下では、バックライト等の光源使用のエネルギーを節約でき、比較的暗い雰囲気下においても内蔵光源を用いて使用できるタイプの液晶表示装置などの形成に有用である。

【0072】

偏光板に更に位相差板が積層されてなる楕円偏光板または円偏光板について説明する。直線偏光を楕円偏光または円偏光に変えたり、楕円偏光または円偏光を直線偏光に変えたり、あるいは直線偏光の偏光方向を変える場合に、位相差板などが用いられる。特に、直線偏光を円偏光に変えたり、円偏光を直線偏光に変える位相差板としては、いわゆる $1/4$ 波長板 ($\lambda/4$ 板とも言う) が用いられる。 $1/2$ 波長板 ($\lambda/2$ 板とも言う) は、通常、直線偏光の偏光方向を変える場合に用いられる。

【0073】

楕円偏光板はスパーツイストネマチック (STN) 型液晶表示装置の液晶層の複屈折により生じた着色 (青又は黄) を補償 (防止) して、前記着色のない白黒表示する場合などに有効に用いられる。更に、三次元の屈折率を制御したものは、液晶表示装置の画面を斜め方向から見た際に生じる着色も補償 (防止) することができて好ましい。円偏光板は、例えば画像がカラー表示になる反射型液晶表示装置の画像の色調を整える場合などに有効に用いられ、また、反射防止の機能も有する。上記した位相差板の具体例としては、ポリカーボネート、ポリビニルアルコール、ポリスチレン、ポリメチルメタクリレート、ポリプロピレンやその

他のポリオレフィン、ポリアリレート、ポリアミドの如き適宜なポリマーからなるフィルムを延伸処理してなる複屈折性フィルムや液晶ポリマーの配向フィルム、液晶ポリマーの配向層をフィルムにて支持したものなどがあげられる。位相差板は、例えば各種波長板や液晶層の複屈折による着色や視角等の補償を目的としたものなどの使用目的に応じた適宜な位相差を有するものであってよく、2種以上の位相差板を積層して位相差等の光学特性を制御したものなどであってもよい。

【0074】

また上記の楕円偏光板や反射型楕円偏光板は、偏光板又は反射型偏光板と位相差板を適宜な組合せで積層したものである。かかる楕円偏光板等は、（反射型）偏光板と位相差板の組合せとなるようにそれらを液晶表示装置の製造過程で順次別個に積層することによっても形成しうるが、前記の如く予め楕円偏光板等の光学フィルムとしたものは、品質の安定性や積層作業性等に優れて液晶表示装置などの製造効率を向上させうる利点がある。

【0075】

視角補償フィルムは、液晶表示装置の画面を、画面に垂直でなくやや斜めの方向から見た場合でも、画像が比較的鮮明にみえるように視野角を広げるためのフィルムである。このような視角補償位相差板としては、例えば位相差フィルム、液晶ポリマー等の配向フィルムや透明基材上に液晶ポリマー等の配向層を支持したものなどからなる。通常の位相差板は、その面方向に一軸に延伸された複屈折を有するポリマーフィルムが用いられるのに対し、視角補償フィルムとして用いられる位相差板には、面方向に二軸に延伸された複屈折を有するポリマーフィルムとか、面方向に一軸に延伸され厚さ方向にも延伸された厚さ方向の屈折率を制御した複屈折を有するポリマーや傾斜配向フィルムのような二方向延伸フィルムなどが用いられる。傾斜配向フィルムとしては、例えばポリマーフィルムに熱収縮フィルムを接着して加熱によるその収縮力の作用下にポリマーフィルムを延伸処理又は／及び収縮処理したものや、液晶ポリマーを斜め配向させたものなどが挙げられる。位相差板の素材原料ポリマーは、先の位相差板で説明したポリマーと同様のものが用いられ、液晶セルによる位相差に基づく視認角の変化による着

色等の防止や良視認の視野角の拡大などを目的とした適宜なものを用いうる。

【0076】

また良視認の広い視野角を達成する点などより、液晶ポリマーの配向層、特にディスコティック液晶ポリマーの傾斜配向層からなる光学的異方性層をトリアセチルセルロースフィルムにて支持した光学補償位相差板が好ましく用いうる。

【0077】

偏光板と輝度向上フィルムを貼り合わせた偏光板は、通常液晶セルの裏側サイドに設けられて使用される。輝度向上フィルムは、液晶表示装置などのバックライトや裏側からの反射などにより自然光が入射すると所定偏光軸の直線偏光または所定方向の円偏光を反射し、他の光は透過する特性を示すもので、輝度向上フィルムを偏光板と積層した偏光板は、バックライト等の光源からの光を入射させて所定偏光状態の透過光を得ると共に、前記所定偏光状態以外の光は透過せずに反射される。この輝度向上フィルム面で反射した光を更にその後ろ側に設けられた反射層等を介し反転させて輝度向上フィルムに再入射させ、その一部又は全部を所定偏光状態の光として透過させて輝度向上フィルムを透過する光の増量を図ると共に、偏光子に吸収させにくい偏光を供給して液晶表示画像表示等に利用しうる光量の増大を図ることにより輝度を向上させうるものである。すなわち、輝度向上フィルムを使用せずに、バックライトなどで液晶セルの裏側から偏光子を通して光を入射した場合には、偏光子の偏光軸に一致していない偏光方向を有する光は、ほとんど偏光子に吸収されてしまい、偏光子を透過してこない。すなわち、用いた偏光子の特性によっても異なるが、およそ50%の光が偏光子に吸収されてしまい、その分、液晶画像表示等に利用しうる光量が減少し、画像が暗くなる。輝度向上フィルムは、偏光子に吸収されるような偏光方向を有する光を偏光子に入射させずに輝度向上フィルムで一旦反射させ、更にその後ろ側に設けられた反射層等を介して反転させて輝度向上フィルムに再入射させることを繰り返す、この両者間で反射、反転している光の偏光方向が偏光子を通過し得るような偏光方向になった偏光のみを、輝度向上フィルムは透過させて偏光子に供給するので、バックライトなどの光を効率的に液晶表示装置の画像の表示に使用でき、画面を明るくすることができる。

【0078】

輝度向上フィルムと上記反射層等の間に拡散板を設けることもできる。輝度向上フィルムによって反射した偏光状態の光は上記反射層等に向かうが、設置された拡散板は通過する光を均一に拡散すると同時に偏光状態を解消し、非偏光状態となる。すなわち、拡散板は偏光を元の自然光状態にもどす。この非偏光状態、すなわち自然光状態の光が反射層等に向かい、反射層等を介して反射し、再び拡散板を通過して輝度向上フィルムに再入射することを繰り返す。このように輝度向上フィルムと上記反射層等の間に、偏光を元の自然光状態にもどす拡散板を設けることにより表示画面の明るさを維持しつつ、同時に表示画面の明るさのむらを少なくし、均一で明るい画面を提供することができる。かかる拡散板を設けることにより、初回の入射光は反射の繰り返し回数が程よく増加し、拡散板の拡散機能と相俟って均一の明るい表示画面を提供することができたものと考えられる。

【0079】

前記の輝度向上フィルムとしては、例えば誘電体の多層薄膜や屈折率異方性が相違する薄膜フィルムの多層積層体の如き、所定偏光軸の直線偏光を透過して他の光は反射する特性を示すもの、コレステリック液晶ポリマーの配向フィルムやその配向液晶層をフィルム基材上に支持したものの如き、左回り又は右回りのいずれか一方の円偏光を反射して他の光は透過する特性を示すものなどの適宜なものをを用いる。

【0080】

従って、前記した所定偏光軸の直線偏光を透過させるタイプの輝度向上フィルムでは、その透過光をそのまま偏光板に偏光軸を揃えて入射させることにより、偏光板による吸収ロスを抑制しつつ効率よく透過させることができる。一方、コレステリック液晶層の如く円偏光を投下するタイプの輝度向上フィルムでは、そのまま偏光子に入射させることもできるが、吸収ロスを抑制する点よりその円偏光を位相差板を介し直線偏光化して偏光板に入射させることが好ましい。なお、その位相差板として $1/4$ 波長板を用いることにより、円偏光を直線偏光に変換することができる。

【0081】

可視光域等の広い波長範囲で1/4波長板として機能する位相差板は、例えば波長550nmの淡色光に対して1/4波長板として機能する位相差層と他の位相差特性を示す位相差層、例えば1/2波長板として機能する位相差層とを重畳する方式などにより得ることができる。従って、偏光板と輝度向上フィルムの間に配置する位相差板は、1層又は2層以上の位相差層からなるものであってよい。

【0082】

なお、コレステリック液晶層についても、反射波長が相違するものの組み合わせにして2層又は3層以上重畳した配置構造とすることにより、可視光領域等の広い波長範囲で円偏光を反射するものを得ることができ、それに基づいて広い波長範囲の透過円偏光を得ることができる。

【0083】

また、偏光板は、上記の偏光分離型偏光板の如く、偏光板と2層又は3層以上の光学層とを積層したものからなっているいてもよい。従って、上記の反射型偏光板や半透過型偏光板と位相差板を組み合わせた反射型楕円偏光板や半透過型楕円偏光板などであってもよい。

【0084】

偏光板に前記光学層を積層した光学フィルムは、液晶表示装置等の製造過程で順次別個に積層する方式にても形成することができるが、予め積層して光学フィルムとしたのものは、品質の安定性や組立作業等に優れていて液晶表示装置などの製造工程を向上させうる利点がある。積層には粘着層等の適宜な接着手段を用いる。前記の偏光板やその他の光学フィルムの接着に際し、それらの光学軸は目的とする位相差特性などに応じて適宜な配置角度とすることができる。

【0085】

前述した偏光板や、偏光板を少なくとも1層積層されている光学フィルムには、液晶セル等の他部材と接着するための粘着層を設けることもできる。粘着層を形成する粘着剤は特に制限されないが、例えばアクリル系重合体、シリコーン系ポリマー、ポリエステル、ポリウレタン、ポリアミド、ポリエーテル、フッ素系

やゴム系などのポリマーをベースポリマーとするものを適宜に選択して用いることができる。特に、アクリル系粘着剤の如く光学的透明性に優れ、適度な濡れ性と凝集性と接着性の粘着特性を示して、耐候性や耐熱性などに優れるものが好ましく用いうる。

【0086】

また上記に加えて、吸湿による発泡現象や剥がれ現象の防止、熱膨張差等による光学特性の低下や液晶セルの反り防止、ひいては高品質で耐久性に優れる液晶表示装置の形成性などの点より、吸湿率が低くて耐熱性に優れる粘着層が好ましい。

【0087】

粘着層は、例えば天然物や合成物の樹脂類、特に、粘着性付与樹脂や、ガラス繊維、ガラスビーズ、金属粉、その他の無機粉末等からなる充填剤や顔料、着色剤、酸化防止剤などの粘着層に添加されることの添加剤を含有していてもよい。また微粒子を含有して光拡散性を示す粘着層などであってもよい。

【0088】

偏光板や光学フィルムの片面又は両面への粘着層の付設は、適宜な方式で行いうる。その例としては、例えばトルエンや酢酸エチル等の適宜な溶剤の単独物又は混合物からなる溶媒にベースポリマーまたはその組成物を溶解又は分散させた10～40重量%程度の粘着剤溶液を調製し、それを流延方式や塗工方式等の適宜な展開方式で偏光板上または光学フィルム上に直接付設する方式、あるいは前記に準じセパレータ上に粘着層を形成してそれを偏光板上または光学フィルム上に移着する方式などがあげられる。

【0089】

粘着層は、異なる組成又は種類等のものの重畳層として偏光板や光学フィルムの片面又は両面に設けることもできる。また両面に設ける場合に、偏光板や光学フィルムの表裏において異なる組成や種類や厚さ等の粘着層とすることもできる。粘着層の厚さは、使用目的や接着力などに応じて適宜に決定でき、一般には1～500 μm であり、5～200 μm が好ましく、特に10～100 μm が好ましい。

【0090】

粘着層の露出面に対しては、実用に供するまでの間、その汚染防止等を目的にセパレータが仮着されてカバーされる。これにより、通例の取扱状態で粘着層に接触することを防止できる。セパレータとしては、上記厚さ条件を除き、例えばプラスチックフィルム、ゴムシート、紙、布、不織布、ネット、発泡シートや金属箔、それらのラミネート体等の適宜な薄葉体を、必要に応じシリコン系や長鏡アルキル系、フッ素系や硫化モリブデン等の適宜な剥離剤でコート処理したものなどの、従来に準じた適宜なものを用いる。

【0091】

なお本発明において、上記した偏光板を形成する偏光子や透明保護フィルムや光学フィルム等、また粘着層などの各層には、例えばサリチル酸エステル系化合物やベンゾフェノール系化合物、ベンゾトリアゾール系化合物やシアノアクリレート系化合物、ニッケル錯塩系化合物等の紫外線吸収剤で処理する方式などの方式により紫外線吸収能をもたせたものなどであってもよい。

【0092】

本発明の偏光板または光学フィルムは液晶表示装置等の各種装置の形成などに好ましく用いることができる。液晶表示装置の形成は、従来に準じて行いうる。すなわち液晶表示装置は一般に、液晶セルと偏光板または光学フィルム、及び必要に応じての照明システム等の構成部品を適宜に組立てて駆動回路を組込むことなどにより形成されるが、本発明においては本発明による偏光板または光学フィルムを用いる点を除いて特に限定はなく、従来に準じうる。液晶セルについても、例えばTN型やSTN型、 π 型などの任意なタイプのものを用いる。

【0093】

液晶セルの片側又は両側に偏光板または光学フィルムを配置した液晶表示装置や、照明システムにバックライトあるいは反射板を用いたものなどの適宜な液晶表示装置を形成することができる。その場合、本発明による偏光板または光学フィルムは液晶セルの片側又は両側に設置することができる。両側に偏光板または光学フィルムを設ける場合、それらは同じのものであってもよいし、異なるものであってもよい。さらに、液晶表示装置の形成に際しては、例えば拡散板、アンチ

グレア層、反射防止膜、保護板、プリズムアレイ、レンズアレイシート、光拡散板、バックライトなどの適宜な部品を適宜な位置に1層又は2層以上配置することができる。

【0094】

次いで有機エレクトロルミネセンス装置（有機EL表示装置）について説明する。一般に、有機EL表示装置は、透明基板上に透明電極と有機発光層と金属電極とを順に積層して発光体（有機エレクトロルミネセンス発光体）を形成している。ここで、有機発光層は、種々の有機薄膜の積層体であり、例えばトリフェニルアミン誘導体等からなる正孔注入層と、アントラセン等の蛍光性の有機固体からなる発光層との積層体や、あるいはこのような発光層とペリレン誘導体等からなる電子注入層の積層体や、またあるいはこれらの正孔注入層、発光層、および電子注入層の積層体等、種々の組み合わせをもった構成が知られている。

【0095】

有機EL表示装置は、透明電極と金属電極とに電圧を印加することによって、有機発光層に正孔と電子とが注入され、これら正孔と電子との再結合によって生じるエネルギーが蛍光物質を励起し、励起された蛍光物質が基底状態に戻るときに光を放射する、という原理で発光する。途中の再結合というメカニズムは、一般のダイオードと同様であり、このことから予想できるように、電流と発光強度は印加電圧に対して整流性を伴う強い非線形性を示す。

【0096】

有機EL表示装置においては、有機発光層での発光を取り出すために、少なくとも一方の電極が透明でなくてはならず、通常酸化インジウムスズ（ITO）などの透明導電体で形成した透明電極を陽極として用いている。一方、電子注入を容易にして発光効率を上げるには、陰極に仕事関数の小さな物質を用いることが重要で、通常Mg-Ag、Al-Liなどの金属電極を用いている。

【0097】

このような構成の有機EL表示装置において、有機発光層は、厚さ10nm程度ときわめて薄い膜で形成されている。このため、有機発光層も透明電極と同様、光をほぼ完全に透過する。その結果、非発光時に透明基板の表面から入射し、

透明電極と有機発光層とを透過して金属電極で反射した光が、再び透明基板の表面側へと出るため、外部から視認したとき、有機EL表示装置の表示面が鏡面のように見える。

【0098】

電圧の印加によって発光する有機発光層の表面側に透明電極を備えるとともに、有機発光層の裏面側に金属電極を備えてなる有機エレクトロルミネセンス発光体を含む有機EL表示装置において、透明電極の表面側に偏光板を設けるとともに、これら透明電極と偏光板との間に位相差板を設けることができる。

【0099】

位相差板および偏光板は、外部から入射して金属電極で反射してきた光を偏光する作用を有するため、その偏光作用によって金属電極の鏡面を外部から視認させないという効果がある。特に、位相差板を $1/4$ 波長板で構成し、かつ偏光板と位相差板との偏光方向のなす角を $\pi/4$ に調整すれば、金属電極の鏡面を完全に遮蔽することができる。

【0100】

すなわち、この有機EL表示装置に入射する外部光は、偏光板により直線偏光成分のみが透過する。この直線偏光は位相差板により一般に楕円偏光となるが、とくに位相差板が $1/4$ 波長板でしかも偏光板と位相差板との偏光方向のなす角が $\pi/4$ のときには円偏光となる。

【0101】

この円偏光は、透明基板、透明電極、有機薄膜を透過し、金属電極で反射して、再び有機薄膜、透明電極、透明基板を透過して、位相差板に再び直線偏光となる。そして、この直線偏光は、偏光板の偏光方向と直交しているので、偏光板を透過できない。その結果、金属電極の鏡面を完全に遮蔽することができる。

【0102】

【実施例】

以下に、この発明の実施例を記載してより具体的に説明する。なお、以下において、部とあるのは重量部を意味する。

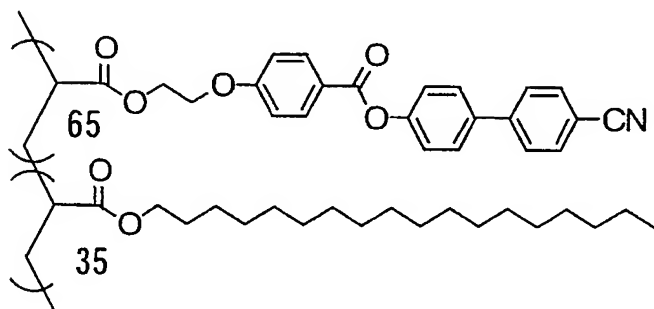
【0103】

実施例 1

ポリビニルアルコール 1000 部と水溶性吸収型二色性色素（キシダ化学社製，Congo¹ Red）10 部を含有する固形分濃度 10 重量%の水溶液（1）を調製した。また、下式化 1 で表される液晶性熱可型樹脂を 30 部含有する固形分濃度 20 重量%のトルエン溶液（2）を調製した。前記水溶液（1）と前記トルエン溶液（2）を、3 部の界面活性剤（花王社製，エマゾール L-10）とともに混合した。この混合溶液をホモミキサーを用いて攪拌し、溶媒キャスト法にて厚さ 70 μm のフィルムを得た。両溶媒を十分に乾燥させたフィルムを、120 $^{\circ}\text{C}$ で延伸倍率 3 倍で一軸延伸処理した後、急冷し、偏光子（フィルム）を得た。

【0104】

【化 1】



式中、「65」、「35」はモル比を表し、便宜的にブロック体として表している。

【0105】

延伸後のフィルムにおける Δn^1 を示す光軸方向は延伸方向であり、ポリビニルアルコールと前記液晶性熱可型樹脂の屈折率差 Δn^1 は 0.18、 Δn^2 は 0.003 であった。また二色性色素の吸収軸と Δn^1 方向を示す光軸方向とがほぼ一致していた。なお、屈折率差は、同条件で延伸したポリビニルアルコールおよび液晶性熱可型樹脂の各々の n_0 、 n_e をアッペ屈折計にて測定（589 nm）した結果から算出した。すなわち、ポリビニルアルコール（ n_0 : 1.52、 n_e : 1.54）、液晶性熱可型樹脂（ n_0 : 1.523、 n_e : 1.720）であり、 $\Delta n^1 = 1.72 - 1.54 = 0.18$ 、 $\Delta n^2 = 1.523 - 1$

．52＝0．003、と算出した。また偏光顕微鏡を用い位相差による着色によって分散分布している液晶性熱可塑性樹脂の微小領域の大きさを見積もったところ Δn^1 方向の平均長さが5 μm であった。

【0106】

また、入射光強度に対する後方散乱強度の比率は、4．3％であった。なお、後方散乱強度は、傾斜積分球付分光光度計により測定した。

【0107】

(平行透過率、偏光度)

上記の偏光子について分光光度計によりその吸収極大波長(500 nm)における平行透過率、偏光度を調べた。得られた偏光子は平行透過率0．33、偏光度0．93であった。市販の耐熱性染料系偏光板(平行透過率0．321、偏光度0．90)よりも高透過率かつ高偏光度であった。

【0108】

得られた偏光子は、マトリクス中に吸収二色性材料が存在するため、光が吸収層を通過する光路長が長くなるため、特願2001-331号に記載の偏光子よりも偏光性能の向上効果が大きい。また製造工程が簡単である。

【図面の簡単な説明】

【図1】

本発明の偏光子の一例を示す概念上面図である。

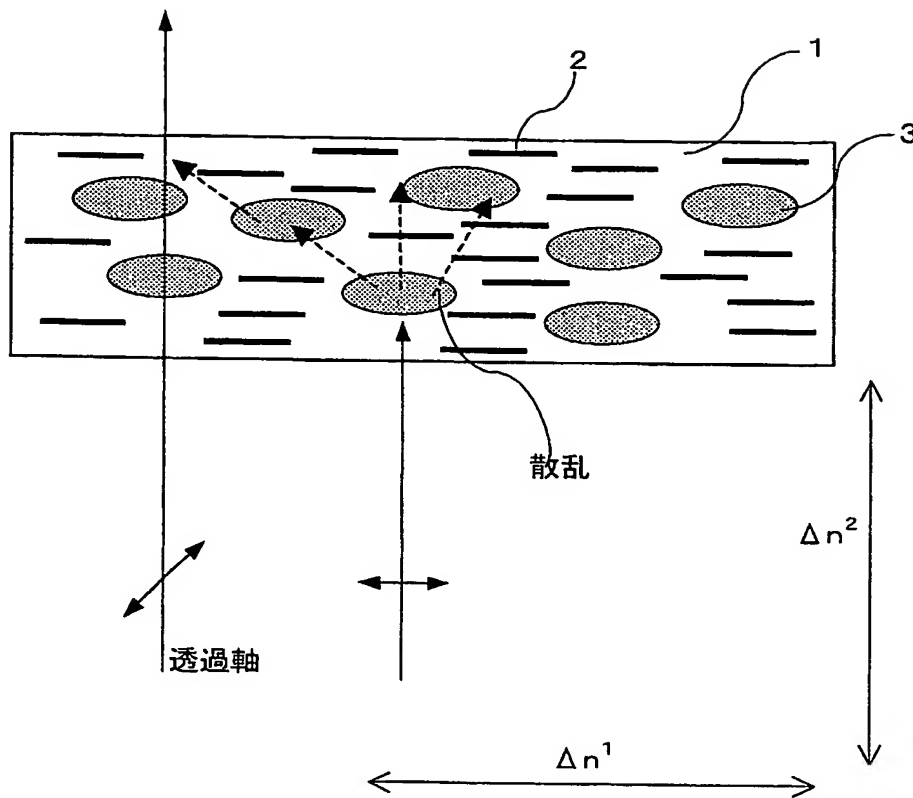
【符号の説明】

- 1 透光性熱可塑性樹脂
- 2 吸収二色性材料
- 3 微小領域

【書類名】

図面

【図 1】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 耐熱信頼性のよい染料系偏光子であって、透過率および偏光度がよく、視認性の良好な偏光子を提供すること。

【解決手段】 吸収二色性材料（２）を含有する透光性熱可塑性樹脂（１）により形成されるマトリクス中に、微小領域（３）が分散された構造のフィルムからなる偏光子であって、前記微小領域（３）は、配向された複屈折材料により形成されており、かつ当該複屈折材料は、少なくとも配向処理時点で液晶性を示すことを特徴とする偏光子。

【選択図】 図 1

特願 2 0 0 2 - 2 6 2 4 0 3

出 願 人 履 歷 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 3 9 6 4]

1. 変更年月日

1 9 9 0 年 8 月 3 1 日

[変更理由]

新規登録

住 所

大阪府茨木市下穂積 1 丁目 1 番 2 号

氏 名

日東電工株式会社